張家山『脈書』の診脈

日本内経医学会発表会

平成21年1月11日

張家山『脈書』とは

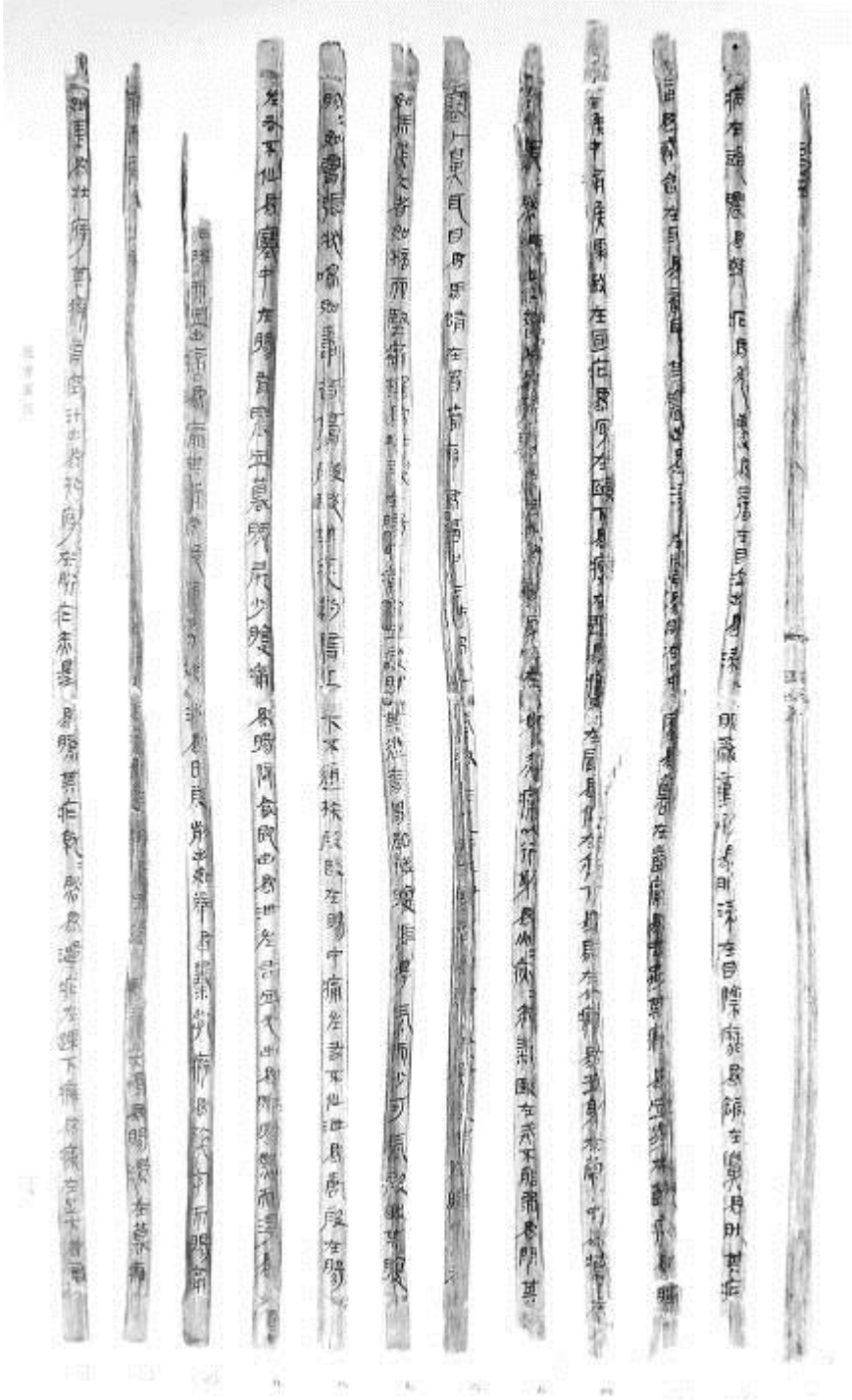
- 1983年12月から翌年１月にかけて、湖北省江陵県で、前漢初期の墳墓の発掘された。数々の副葬品が出土したが、その中に8種の簡書があった。江陵県は、湖北省の省都武漢市の西方約 270km、長江北岸の町である。
- 墳墓は、張家山M 247西漢（前漢）墓という。張家山遺跡は、煉瓦工場の敷地内にあり、煉瓦の材料となる粘土の層に棺があったために、竹簡が2000年を経ても腐敗することなく保存されていた。
- 墓の主人は、低級の官吏であり、法律に詳しく、算術がたち、医術がすきな人物、と推定される。

内蒙古自治区
吉林省
沈阳
辽宁省
朝鮮
日本
呼和浩特
北京市
天津市
宁夏回族
自治区
黄
河北省
渤海
韩国
银川
石家庄
太原
西宁
河
山西省
济南
山东省
黄海
兰州
甘肃省
西安
郑州
江苏省
陕西省
河南省
合肥
南京
上海市
湖北省
安徽省
成都
武汉
杭州
四川省
重庆市
浙江省
东海
长沙
南昌
江
湖南省
江西省
福州
台北
贵阳
福建省
贵州省
昆明
广西壮族自治区
广东省
台湾省
云南省
广州
南宁
香港特別行政区
澳门特別行政区
越南
海口
老挝
■ 首都
■ 直轄市
○ 省都・自治区首府
□ 特別行政区

出土した簡書8種

『暦譜』・『二年律令』・『奏けん書』・『脈書』・
『算数書』・『蓋廬』・『引書』・『遺策』

- 『暦譜』は、前202年から前186年までの、毎月朔日の干支が記してあるので、埋葬年代の下限は前186年である。
- 『脈書』は、馬王堆医書と近似している。
- 『引書』は、馬王堆『導引図』と近似している。



脈書

引書

折陰者、前一足、昔（錯）手、佛（俛）而反鉤之。

馬王堆『導引図』

馬王堆帛書

第１帛書
　①　？
　②『足臂十一脈灸経』
　③『陰陽十一脈灸経』（甲本）
　④『脈法』
　⑤『陰陽脈死候』
　⑥『五十二病方』
第２帛書
　⑥『五十二病方』（つづき）
第３帛書
　⑦『却穀食気』
　⑧『陰陽十一脈灸経』（乙本）
　⑨『導引図』
第４帛書
　⑩『養生方』
　⑪『雑療方』
　⑫『胎産書』

『脈書』の構成

第一段落　60余種病名（第1簡～第16簡）

第二段落　「陰陽十一脈灸経」（丙本）（第17簡～第48簡）

第三段落　「陰陽脈死候」（乙本）（第49簡～第53簡）

第四段落　「脈法」（乙本）（第54簡～第66簡）

今回取り上げる診脈の部分（第63簡～第65簡）

①它脈盈、此独虚、則主病。它脈滑、此独渋、則主病。它脈静、此独動、則主病。

②夫脈固有動者、骭之少陰、臂之鉅陰、少陰、是主動。疾則病。

③此所以論有過之脈殴、其餘謹当視脈之過。

①它脈盈、此独虚、則主病。
它脈滑、此独渋、則主病。
它脈静、此独動、則主病。

- 察九候、獨小者病、獨大者病、獨疾者病、獨遅者病、獨熱者病、獨寒者病、獨陥下者病。（『素問』三部九候論篇）
- 上下左右之脉、相應如參春者、病甚。（『素問』三部九候論篇）

①脈状診が行われていた。

②盈・虚、滑・渋、動・静、3組の脈状があった。

（動・静の組は、現在は、残らない。）

③比較脈診が行われていた。

④左右も比較していた可能性がある。

（素問から逆算すれば）

⑤「主病」とあるので、脈状診によって、病気を診断していたと考えられる。

②夫脈固有動者、骭之少陰、臂之鉅陰、少陰。是主動。疾則病。

- 經脉十二、而手太陰、足少陰･陽明、獨動不休。（『靈枢』動輸篇）
- 陽明者常動、巨陽少陽不動。不動而動、大疾。（『素問』病能論篇）

- （脈書）手の太陰、手の少陰、足の少陰
- （動輸篇）手の太陰、足の少陰、足の陽明
- （傷寒論）寸口脈（手の太陰）、趺陽脈（足の陽明）、少陰脈（足の少陰）
- （三部九候論篇）頭部3カ所、手部3カ所（合谷・大淵・神門）、足部3カ所（太谿・衝陽・太衝）

＊これらの拍動部で、①動、②病、をみていた可能性が高い。①異常な拍動で経脈の乱れを診ていた。②比較脈診・脈状診で病気を診断していた。

＊これら以外で臨時に拍動をみるのは、大きな病気のときである。

①『脈書』に「主動」と「主病」ということばがあり、「是動」と「所生病」と対応している可能性あり。

②「是動」は、異常な脈拍から診察できる「経脈の症状群」、および切経で診察できる「経脈の症状群」。

③「所生病」は脈状診・比較脈診で診察できる病気。（病気とは、病気と認定する基準に達したもの。認定する基準は、四診にあるが、主に脈診。）

③此所以論有過之脈殴。
其餘謹当視脈之過。

① 論有過之脈:「有過の脈」を論ぜよ＝脈診
過＝禍(わざわい、さいがい)のある脈状をよく考えなさい。
② 其餘謹視脈之過:「脈の過」を視よ⇒切経
それ以外は、慎重に(謹)、経脈の経過(流注)を観察しなさい。
◎脈の診察には、脈状の診察と、経脈(流注)の診察の、2種がある。

①脉之卒然動者、皆邪氣居之、留于本末。

②不動則熱、不堅則陷且空、不與衆同。

③是以知其何脉之動也。（『靈枢』経脈篇）

①の診察：拍動が突然に乱れる（動）のは、邪気が客していて、本末（経脈）に留まっているから。＝脈診

②の診察：拍動しなければ熱をおび、（脈が）硬くなければ陥没か空虚していて、他の経脈と異なっているはず。＝切経

③以上の２点（脈診と切経）から、経脈の「変動」を知ることができる。

１　按其所過之經以調之。（『靈枢』四時気篇）
＊その経過の経脈を切按して、調整しなさい。

２　氣有餘則當脉所過者熱腫。（『靈枢』経脈篇）
＊気有余であれば、脈の経過部分が熱腫するだろう。

３　審切循捫按、視其寒温盛衰而調之。（『靈枢』経水篇）
＊詳細に切循・捫按して、寒温盛衰を観察せよ。

４　熱則疾之、寒則留之、陷下則灸之。（『靈枢』経脈篇）
＊（切経して）熱感があれば、冷えていれば、陥下していれば・・・

◎以上、切経によって、経脈（流注）の寒熱虚実を診察する。

◎診脈（脈を診る）は＝脈診＋切経である。

①脈診：

a）脈状からは、病気をよく考察し、

b)拍動の乱れから、病経を判断する。

②切経：経脈（流注）の寒熱虚実をよく観察すること。

◎『脈法』の診脈は、『素問』三部九候診に近い。

◎是動病は、①のbと、②とで判断する。

◎所生病は、①のaで、診断する。